野田宇太郎 文学散歩 第14巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　14
信濃甲斐文学散歩

昭和54年4月2日　　初版第1刷発行

著　者　　野田宇太郎
発行者　　佐藤　弘一
発行所　　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　　振替東京2-42149

©1979　0395-90114-7354　　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目次

浅間高原

軽井沢　三

碓氷の坂　変転　峠にて　氷のうた　教会と別荘
聞書き　軽井沢の街路樹　櫻井北民　有島武郎の死
「美しい村」　正宗白鳥文学碑　白秋の「落葉松」　遠近の
宮　追分の詩人達　分去の石の記録

北軽井沢　六

小説「草分」　大学村へ　哲学者の碑

小諸　八六

北国海道　高原都市　木村熊二と小諸義塾　小諸の藤村
古城址　中棚の水明楼

千曲川

上田　一〇七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

千曲川　上田懐古　「日本人久米先生」の碑　山本鼎記念館　大屋の農民美術研究所　別所温泉　放牧の絵馬と白秋　唐風八角塔と空穂　戸倉と上山田

姨捨　一三七
更級の道　「田毎の月」　姨捨山

長野　一四七
松代遠望　地震と大本営　象山と英俊　「カチューシャ」の碑　善光寺

山田温泉　一五九
鷗外の「みちの記」　山田温泉と鷗外の手紙　藤井荘にて
山田の與謝野夫妻　牛の牢と鳳山亭址

戸隠山　一七一
戸隠へ　『戸隠の絵本』　奥社

柏原　一八〇
一茶の故郷　柏原のあちこち

湖と河　一八八
野尻湖畔　再び千曲川に沿うて

飯　山　二〇三
『破戒』の地図　雪と寺の山都　真宗寺にて　古城と丑松
正受庵　野沢温泉より

佐久から筑摩野へ

佐久の旅　二一九
佐久と『千曲川のスケッチ』　佐藤春夫と『佐久の草笛』　復原された藤村の小諸旧居　「藁草履」の旅
諏訪の湖山　二二四
富士見高原　高原療養所　富士見公園にて　諏訪湖畔
齋藤茂吉の「悲報来」　赤彦の家と墓と歌碑　蓼科の歌
霧ヶ峰
松　本　平　二六八
高原の爆弾　松本城　木下尚江故家　開智学校　城山公園にて　浅間温泉にて　碌山美術館　美ヶ原にて
松本追記

筑摩野　二九九
村井駅前の歌碑　広丘小学校

木曾路から伊那へ

木曾路　三〇九
旅人　洗馬にて　露伴の「酔興記」と『風流仏』　福島『夏草』の詩郷　桟と寝覚の床と　木曾路の馬車　須原にて　妻籠と「初恋」　橋場にて　『夜明け前』の世界　馬籠峠　水車塚　ふるさと　藤村と馬籠　藤村記念堂　大黒屋　永昌寺　永昌寺墓地にて　馬籠の変容　木曾の果て　新茶屋の芭蕉句碑

伊那路　四一六
伊那の古道　森田草平終焉の寺　伊那の古都—飯田　「竹枝町巷談」　風越山　獨歩と飯田　太宰の松　春草と龍峡　柏心寺　烈婦不二　詩人の生家　なかん町　耕平歌碑　「咒文」の詩碑　飯田追記　高遠にて

6

甲斐

富士五湖と周辺　四六三

甲斐の富士　道志街道にて　本栖湖と西湖　湖の詩

中村星湖の碑　御坂峠の太宰治　山中湖にて

甲府盆地　四八八

水晶と葡萄の国　「日下部駅」と森鷗外　笛吹川のほとり

一葉女史碑　昇仙峡と落葉　甲府にて　牧水の旅と蛇笏

の家　下部鉱泉　身延山久遠寺

*別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

信濃甲斐文学散歩　おぼえがき

信濃も甲斐も戦後比較的に早くから足を蹈み入れていた地方である。とくに木曾は馬籠に島崎藤村記念堂が建設されることになって、まだ文学散歩を書きはじめていなかった終戦一年目の昭和二十一年秋からしばしば訪れるようになり、その後に起った都市化現象による自然環境の変化も見つづけて来た。だが信濃を文学散歩としてまとめて書いたのは昭和四十三年出版の『信濃路文学散歩』が最初で、本書ではそれを「浅間高原」「千曲川」とし、あらためて「佐久の旅」「諏訪の湖山」「松本平」「木曾路」「伊那路」を書きつづけて、「諏訪の湖山」以外はすべて昭和五十三年十一月の再調査によって書き下ろし、本書に収めた。

甲斐は早くからの念願でもあった「富士五湖と周辺」だけは昭和五十二年四月に書いていた。それに昭和五十三年十二月調査の「甲府盆地」をそのまま書き下ろし、信濃と共に甲斐もまた完成することが出来た。（著者）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

信濃甲斐文学散歩

浅間高原

軽井沢

碓氷の坂

碓氷峠の古名は信濃坂であった。記録によると昔の信濃の国には西と東に二つの信濃坂があって、西は伊那郡から恵那山麓を美濃に越える山坂だが、それよりも上野(かみつけ)の国から信濃に登る東の碓氷峠の方にこそ、信濃坂という本当の実感があって面白いと思う。武蔵野の辺りから中仙道をはるばると碓氷川のほとりまで辿り着いたところで、前方にそばだつ碓氷峠を仰ぐときの旅人の気持。碓氷の上には浅間山が頭を出し、旅情を唆るかのように噴煙を空になびかせている。あの高い浅間の麓まで険阻な坂道を登りつめなければ、お前は信濃の国には入(はい)れないぞと意地悪の神に云われているような実感が湧いたろう。国鉄信越線は完全に電化され、自動車も平坦地と同じように走る現代の進歩した機械文明に身をまかせて、時間と距離の自覚を失った人々には、信濃坂は幻の坂にすぎない。

東山道と呼ばれ、それが中仙道になっても、自分の足で歩くよりほかに方法もなかった上古の旅人たちには、碓氷峠はまさに宿命の信濃坂であった。それは必ずしも登り坂が曲りくねってきびしいというだけではなかったろう。そこを登りつめてはじめて信濃の国がひらけ、東の平野からやって来た旅人は、まるで雲の上でもゆくような孤独にさいなまれ、高原の道を踏みしめてゆく。そこからいよいよ西国への旅路がはじまり、ふるさとは既に遠い思い出にすぎなかった。

このような碓氷越え信濃坂の哀れは、次の『万葉集』の防人の歌からも、時代を越えた人情として窺い知ることが出来る。

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

（巻十四・読人しらず）

ひなくもり碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも

（巻二十・他田部子磐前）

前の歌は防人の妻が旅ゆく夫を想い、後の歌は天皇に召されて防人として西国への旅路についた武蔵の国の武人が、故郷に残してきた妻を思う歌である。そして前の「日の暮」も後の「ひなくもり」も、碓氷（薄日）にかかる枕言葉と知れば、碓氷峠がいかにさみしいイメージのこもる黄昏の情感の山であったかもまた知られよう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook